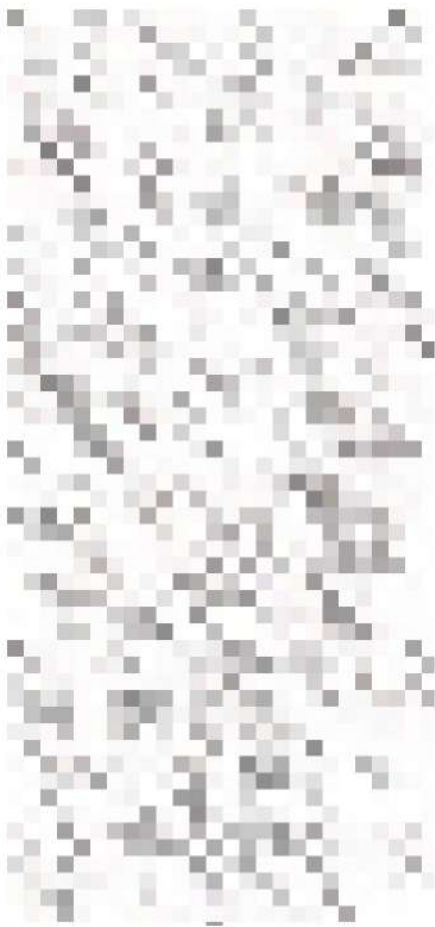


# Scramble Shot



## Opera ● メッツマッハーのチューリヒ歌劇場《タンホイザー》プレミエ

1月30日に当劇場でプレミエを迎えた《タンホイザー》は、名演出家ハリー・クプファーの手がける5度目の《タンホイザー》ということで注目されていた。しかし、幕が上がる前、序曲の数小節で目頭が熱くなる演奏を披露したインゴ・メッツマッハーにまず感嘆した。何の気負いもなく、何気なく始まった音楽が、遅めのテンポで淡々と流れていくだけでけって押し付けない。そうするとワーグナーの音楽は輝きを増し、聴衆を歓喜の渦に巻き込み、神々しさまで表現できるものなのだ。その熱は4時間半の上演時間中続き、曲を口ずさみながら帰って行く人を何人も見かけた。



第2幕、歌合戦のシーンより。後ろ上部のガラスの壁がスクリーンとなって、大広間が映し出されている

幕が上がると、大勢のダンサーが上品なエロティシズムを魅せ、タンホイザーはヴェーヌスに麻薬を打たれている、という現代の悪の巢が広がっている。舞台上はガラスの押し戸がいくつも連なっている壁があり、中央で折れたり、直線になって伸びたりすることで舞台転換を不要にしている。上部のガラスの壁はスクリーンにもなり、1幕4場のヴァルトブルクではゴルフ場に、2幕ではテレビスタジオになり、歌合戦では大広間のシャンデリアが映され、3幕では駅舎になるのが効果的で美しい。

エリーザベトの穢れない強さを体現したニーナ・ステンメ、難役を出し惜しみなく歌いきった題名役のペーター・ザイフェルト、救いのない題材の中で温かい声と存在で光っていたヴォルフラムのミヒヤエル・フォレ、ワーグナーの声ではないものの、ヴェーヌスの尋常でない存在感を出していたヴェッセリーナ・カサロヴァら歌手陣の健闘も素晴らしい。

まずは作曲者の音楽が堪能でき、その次に、時代に照らし合せつつ、作曲者の意図を伝える演出があり、そして歌手もよかった、と評価できるのは、オペラのあるべき姿であろう。

このような質の高いオペラ制作が、オペラ界の将来をつないでいく鍵になるのではないだろうか。 (中 東生)

